

「土と炎の芸術」 — 加藤 幸兵衛



昭和三十年の秋、五十歳を過ぎた幸兵衛は、一人、多治見市の自宅の庭先に立って空を眺めていた。そこには、どこまでも澄みきった秋の空が広がっていた。「どうしてできないのか。なぜあの色が出ないんだ。青磁は白色ではない。あの、淡い青色はどうしたら出るか…。」

幸兵衛は青磁に取り組んでいた。静かな青みをおびた青磁は、古来、陶磁器の最高峰とされたものである。特に、幸兵衛は中国南宋で作られた青磁に魅せられ、この研究に打ち込んで二十年にもなるのに、自分で気に入った作品が一つもできていない。幸兵衛の心にあせりがあった。

当時、一般の窯でも青磁は焼かれていた。しかし幸兵衛は、最高の青磁を焼くには、もっと適した土があるに違いないと思っていた。青磁を始めたころの五年間は、土を求めて野山を歩き回った。そして、粘土質の土を見つけると必ず持ち帰り、精製して焼いてみた。青磁は生地を薄く堅く焼き上げなければならないため、窯の温度を千二百度にも上げる。すると、とけたり、ひび割れてしまう土、また鉄分が浮き出てくすんだ色に焼けてしまう土もあった。しかし幸兵衛は、山深い小川のほとりから持ち帰った一握りの土が青磁に適していることをつきとめた。焼きあがった皿の形はくずれていない。もちろん、ひび割れもしていない。指先ではじくと、軽い金属音を長く響かせた。「これだ。この土さえあれば、もう九分どおり成功したも同じだ。」と幸兵衛は喜んだ。幸兵衛は心をおどらせ、見つけた所からその土を選び、何日も何日もかかって、もろ（仕事場）の片隅に盛り上げた。その土は手によくなじみ、ろくろの上で次々と皿に形作られていった。もろのたなには薄手の皿が並べられた。

秋も深まったある日、幸兵衛は焼き上がったばかりの皿を一枚一枚取り出して

※¹ 焼き物にぬるうわぐすり

※² 粉をまぶしたような青白色

た。それは、まわりの者から見れば実に見事なできばえのように思えた。生地の上のガラス質の釉※¹は、透明度もあり、青く輝いていた。一枚を指ではじくと軽い金属音が響いた。幸兵衛はその皿をかたわらに置くと、次の皿を取り出しじつと見ていた。また指先ではじめてみた。その皿を前に取り出した皿の上に重ねて置いた。次々と皿を取り出した。

「一枚もない。みんなだめだ。」と、幸兵衛は口の中でつぶやいた。やがて、近くにあつたれんがを手にとると、ものも言わずに一撃を加えた。皿はこつぱみじんに飛び散った。幸兵衛は、気に入った作品でないと全部割ってしまう。もう何度もこんなことをくり返してきた。

幸兵衛は、今回の窯出しでは必ず青磁のあの色が出ると自信を持っていた。だが、自分のめざす美しい粉青色※²の青磁は出てこなかった。幸兵衛は激しく打ちのめされた。やつとつかみかけた希望の灯がふつと消えたようなそんな思いが、幸兵衛を苦しめた。

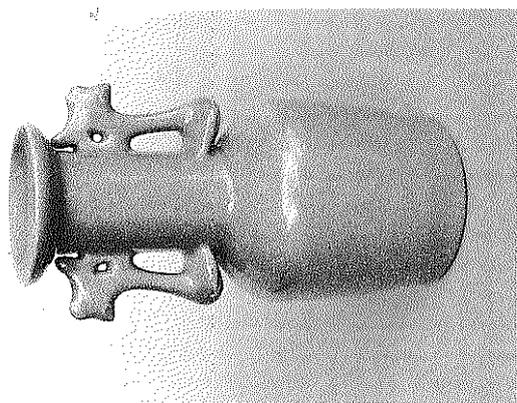
そう思いながらも、中国の古陶器を見ると、幸兵衛の目は輝いた。「これを作ったのはどんな人間か。なぜ自分には、この青磁ができないのだ。この古陶器の中には、まだ知らぬ技法がかくされているにちがいない。」

加藤幸兵衛は、十六歳で家業を継いだ。加藤家は代々この地の陶工で、古くは、江戸の将軍や尾張の徳川家に製品を納めたほどの家柄であつた。だが、父の代に財産を失つて、幸兵衛が引き継いだものは、わずかに古いもろ一棟であつた。しかし、若者らしい一途さで、幸兵衛は家業に取り組んだ。やがて、十年の歳月が流れた。どうにか家業が軌道に乗り、職人も多くなりもろも増した。以前のような活気が戻ってきた。そのころ、美濃焼き職人の中から、日展の工芸部門で入選したものがいた。幸兵衛の心はずんだ。自分もただ茶碗を焼くだけで終わりたくない。美しい、人の心を打つような作品を作りたいと思つた。

それ以降、幸兵衛は、家業のかたわら、陶芸作家としての道を歩みだした。一つの目標ができた幸兵衛は、燃えるような研究心と精魂とを傾けた。

しかし、その幸兵衛が、また、こうして苦悩にあえいでいた。青磁の生地はできたが思うような色が出ない。幸兵衛は皿づくりをやめて、タイルのような板だけを

たくさん作った。その板にあらゆる青磁釉をかけていった。釉薬の成分や濃度を少しずつ変えてみたり、わら灰を混ぜたものを塗ってみたりして、研究に研究を重ねた。その結果、当時、青磁には禁物だとされていた鉄分を微量にふくませた釉薬を、何べんも何べんも重ね塗りすることにより、その色を出すことにとうとう成功したのである。やがて、幸兵衛の窯からは、見事な青磁が次々と生まれ始めた。



加藤幸兵衛作
「青磁鳳凰花生」

晩年のある日のことである。青磁の大作を作りたいという幸兵衛は、力をふりしぼつてろくろをひき、そして「臙青磁」と呼ぶ鉢のいくつかを窯の中に入れた。家族や職人が「体に悪い、休んでください。」と言っても、三十時間ついに一睡もせず、自分で火の色を見て、温度を調節しながら焼いた。

火を止め、窯の温度が下がってから、窯の口が開けられた。「頼むぞよ。」まわりの者に幸兵衛は声をかけた。作品が取り出された。それをじつと見入った。厳しい顔で無言のままかたわらに置く。しばらくして、また次の作品を取り出す。ふうつと息を吹きかけて、その表面をなでる。ほおがかすかにゆるんだ。手袋を通して伝わるほのかなぬくもりを楽しむかのように、じつと待ち続けていた。

「いかがです、先生。」

弟子の一人が、たまりかねて言った。

「うむ、これからじゃ。まだ、これからじゃ。」

八十四歳の幸兵衛は、もとの厳しい顔にもどつて、こうつぶやくばかりであった。

出典 岐阜県教育委員会 郷土の道徳「郷土史研究にうちこむ」

(平成十三年十一月)